

112 日本のアイリス—ハナショウブとシャガ（2022年5月19日）

アイリスは、ギリシャ神話に登場する虹の女神イーリスが名前の由来となっています。ジャーマンアイリス（学名 *Iris germanica*）、ダッチアイリス（学名 *Iris hollandica*）などヨーロッパの国名が付いたアイリスを多くみかけますが、アイリスはヨーロッパだけのものではありません。実は、「日本のアイリス」もあります。

日本を代表するアヤメ属の花は、アヤメ（学名 *Iris sanguinea*）です。カキツバタ（学名 *Iris laevigata*、仏語では *Iris d' eau japonais*）は、フランス語では日本にゆかりのある花であることがわかります。カキツバタと言えば、尾形光琳（1658-1716）が描いた「燕子花図」（写真下、一部のみ）が有名です。光琳の代表作で、国宝に指定されています。



そして、日本のアイリスと言えるのが、ハナショウブ（学名 *Iris ensata*、仏語で *Iris du Japon*）です。ハナショウブは、アヤメやカキツバタと同じく、日本、朝鮮半島や東部シベリア地方を原産とする花です。右の写真は、5月初旬にパリ植物園（Jardin des Plantes）で撮影したものです。写真では分かりにくいですが、ハナショウブの花びらの中央部には、黄色い斑紋が入っていることが特徴です。ただし、ダッチアイリスも、花びらの中央部が黄色くなっています。花びらや葉の特徴、生育するのが水中か陸地か、開花時期など、品種によって違いはありますが、アヤメ属の花は似たような姿のものが多く、見分けることが難しいです。



## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

さらに悩ましいのが、日本の名前がついたアヤメ属の花が他にもあることです。それは、小ぶりの可愛らしい花で、日本でもパリでも見かけるシャガです（写真右）。この花の学名は、*iris japonica*です。18世紀か19世紀に日本に来たヨーロッパの植物学者が、この花を *iris japonica* と名付けてヨーロッパへ持ち帰ったことから、現在ではフランスでもシャガを見られるのかもしれませんが。



ハナショウブは、パリでは、パリ植物園のほか、ブローニュの森にあるバガテル公園で観ることができます。バガテル公園はバラが有名ですが、アイリス庭園もあります。ヨーロッパ原産のアイリスは5月が見頃で、ハナショウブは6月初旬に見頃を迎える予定です。アイリスの仲間は種類が多く、色や花びらの形も多様で、優美な花を咲かせます。美しい花を愛でるときに、その由来や学名といった難しいことを考える必要はありませんが、そこで目にするアイリスは、もしかしたら日本のアイリスかもしれません。事実、アイリス庭園の中央部にある水が張られたスペースには、2001年に静岡県河津町に河津バガテル公園が開園した際に、河津町からパリ市へ寄贈されたハナショウブ（写真右は2021年に撮影されたもの）も植えられています。この公園には、「日本の鏡」



(miroir japonais) という名の池があります（写真下）。バガテル公園は、その歴史を18世紀に建てられた城と庭園に遡ることができるヨーロッパ式庭園（公園内のバラ園は1905年に開園）ですが、密かに日本の名を持つものが隠されています。

